

C—26 女物長着の衿肩明・くりこしについて (第2報)

相模女大学芸 永井 房子
立正女大家政 ○佐藤由紀子

1. 和服の着やすいきものを考える時、着こなしに影響のあると思われる衿について、今回はその基礎的段階として、衿肩明の位置及び繰越し分量について木綿浴衣地で検討してみたが、今回は剛軟度の異なる着尺地を用いて検討し、更に標準体、いかり肩及びなで肩のボディに着用させ、比較検討した。

2. 着用方法、計測項目及び計測方法は前回同様である。尚、いかり肩は肩傾斜角度 14 度、なで肩は 34 度のボディを使用した。

3. (1) 肩山線の上に衿肩明をあける方法、肩山より 2 cm 後方に衿肩明をあける方法と衿付け線に 1 cm の縫代をつけ衿肩明をあける 3 方法を検討した結果、前回の木綿浴衣地と傾向としては大差はなかった。(2) 剛軟度の異なる 2 種の製作物についての比較は、測定個所①②については木綿浴衣地に比べ剛軟度の小さい着尺地の方が頸についた状態—即ち体になじんだ衿型であった。測定個所③④についても、剛軟度の小さい着尺地の方が開角度は大きく、従って離れ寸法は小であった。(3) 標準体、いかり肩及びなで肩に着用させた場合、衿の型に何らかの影響があると思われたが、計測値の差はボディの肩傾斜の差であって、衿型に影響するものではなかった。